

孝本 貢先生を悼む

商学部教授 佐 藤 嗣 男

孝本さん、とにかく早すぎるよ。

ともに定年までアト3年半、お互い、がんばって行こうよと、つい、この間、7月に言ったばかりじゃないか。今は、喧嘩相手がいなくなって、何だか、ぽっかり穴が空いてしまって全くやり切れません。

思えば、学兄とホントに知りあえたのは、私が明大商学部の専任になって2年、1990年、森川学部長のもと、学部執行部と一緒にやった時だったと思います。

杉江先生が一般教育主任、孝本さんは教務主任で、私は和泉産経科主任でした。春休みでのんびりしていましたが、突然の呼び出し。「明大大学史」にも残る、あの代人受験事件でした。マスコミが殺到するわ、何だわで、オーイ、佐藤さんよ、週刊誌の記者がトイレまで追っかけてくるんだよ、かなわねえよ。それでもって、何度か、2人で逃げまわって、最後は呑み屋。お茶の水駅前のビルの地下に、“源内”という店があるんですが、記者どもがいなくなるまで、よく吞んでいたものです。

“源内”といえ、商学部の和泉の先生方のお酒の好きな連中が、教授会が終わるといつもたむろして、ああでもない、こうでもない、談論風発、楽しくやっているんですが、そんな中、孝本さん、ホントにあなたは学生のことを考えてた。1990年代、大学生の学力低下が言われる中で、いち早く、高校と大学をつなぐ科目が商学部には必要だと、お酒そっちのけで語ってた。今商学部に設置されている「基礎演習」という科目、あなたの熱意がなかつ

たら、生まれてはいなかった。

そしてまた、“源内”での熱い討論と言え、この数年間、あなたは、学徒出陣や特攻隊について学問的興味を大いに持っていましたよね。ゼミの学生をつれて九州の知覧にも何度か行かれています。そうした問題の学問的究明にかけて、学会を立ち上げるんだとも言っていました。志半ばで、あの世に逝ってしまったこと、ホントに心残りだったと思いますが、必ずやアトを継いでくれる若い研究者が出て来るものと確信しています。

そうした孝本さんの想いは、『商学部百年史』¹⁾とか『和泉丘の75年』²⁾といった年誌作成の上でも、学徒出陣の項など、大いに力あるところではありましたが、ところで私個人に限って言えば、残念無念、結着のつかない心残りがひとつできてしまいました。

孝本さん、あなたはあの作家の坂口安吾はふざけていると言う。戦争に対する安吾の姿勢は許せねえ。言い出したら一步も退かぬやんちゃ坊主。私が、いいや、そうじゃねえなんて言い出すと、あの大きくもない目をむいて、更に攻めてくる。——孝本さんよ、ぜひ決着をつけたいものですね。

商学部の問題にしても、まだまだ結着のついていないものが山積みです。

孝本さん、今いっちゃうなんて、早すぎますよ——とは言え、この春から疲れた疲れたが口ぐせとなっていた孝本さん、まずは心から休んで下さい。

そのうち、あの世で必ずや安吾論争、結着をつけたいと思っていますので、それまで、安らかにお眠り下さい。今日までのご交誼に感謝しつつ、ご冥福をお祈り申し上げながら、弔辞とさせていただきます。

孝本さん、お達者で。

合掌

注) これは、2009年9月29日の故孝本貢先生の告別式において、友人・同僚代表として読まれた弔辞を再録したものである。

1) 商学部100周年記念史委員会『明治大学商学部100年史——資料を中心に』2007年9月、ぎょうせい。孝本先生は、「商学部の充実と戦時体制下の大学・3」

「大学の大衆化と商学部」の項を執筆され、編集委員として全体のとりまとめを担当された。

- 2) 明治大学和泉委員会編『和泉丘の75年——和泉キャンパスの“明日”をめざして』2009年3月。孝本先生は刊行準備委員会の顧問を務められ、「Ⅲ-1 予科教育の实践と『報国団』の編成」「Ⅲ-2 大戦期における予科教育の変貌」を執筆された。また『和泉丘の50年』1985年3月刊行の際にもプロジェクトチームに加わっている。